

# 臨床心理士の治療現場における心理療法の選択過程

○田中響<sup>1</sup>・田中秀樹<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>広島国際大学大学院心理科学研究科・<sup>2</sup>広島国際大学心理学部)

## 目的

本研究では、質問紙調査によって臨床心理士の実態を捉え、また、質的調査によって、「臨床心理士が自らの中心となる技法をどのような経緯で獲得していくのか」、「実際の臨床場面で心理療法を決定する際に、どのようなことに留意しているのか」ということを捉え、心理療法を習熟、指導する際の参考となることを目的としている。

## 方法

### 1) 質問紙による調査

①対象と配布・回収形式；調査の趣旨に賛同した広島国際大学大学院修了の臨床心理士 28 名を対象に郵送法によって調査を行った。

②調査内容；性別・職域・臨床心理士の資格を取得してからの年数・中心として用いている心理療法について、の簡単な内容に回答を求めた。

### 2) 半構造化面接による質的調査

①対象と形式；質問紙調査に回答して下さった心理職に従事している臨床心理士の内、書面によって同意を得られた 6 名に対して、一人 1 時間半程のインタビューを行った。

②インタビュー内容；経験のある臨床家 1 名やゼミ生と話し合っ設定した質問をベースにインタビューを行った。臨床心理士が自らの中心となる技法を獲得していく経緯に関する質問や、臨床場面で心理療法を決定する際に、どのようなことに留意し、悩むのかということに関する質問を行った。

③手続き；半構造化面接によってデータを得た。記録は 2 つの IC レコーダーによって行った。

④分析手続き；経験のある臨床家 1 名の指導のもと、M-GTA によって分析を行った。

## 結果・考察

### 1) 質問紙による調査

①有効回答数は 28 名であった。表 1 は、質問紙調査の結果をまとめたものである。問 1 は性別（男性 10 名、女性 18 名）、問 2 は臨床心理士になってから何年目か（1 年 7 名、2 年 4 名、3 年 1 名、4 年 4 名、5 年 4 名、6 年 3 名、7 年 3 名、8 年名）である。

表 1 質問紙による調査

問 3. 職域（複数回答が可能な項目であるため、のべの人数）	医療領域 21 名 福祉領域 8 名 教育領域 7 名 その他の領域 3 名
問 4. 中心として用いている心理療法の有無	ある 24 名 ない 4 名
問 5. 中心として用いている心理療法の種類（問 4 で「ある」と答えた方のみ）	力動的心理学療法 13 名 認知行動療法 7 名 来談者中心療法 2 名 その他 2 名
問 6. 問 5 で答えた心理療法を、中心としようと決心した時期（問 4 で「ある」と答えた方のみ）	大学生の時 4 名 大学院生の時 13 名 臨床心理士になった後 7 名
問 7. 問 5 で答えた心理療法を、中心としていることへのスーパーバイザーの影響（問 4 で「ある」と答えた方のみ）	ある 21 名 ない 3 名
問 8. 大学生や大学院生時代に、関心のあった心理療法（複数回答が可能な項目であるため、のべの人数）	力動的心理学療法 16 名 認知行動療法 10 名 来談者中心療法 1 名 その他 3 名

### 2) 半構造化面接による質的調査

①概念化；音声データをもとに逐語録を作成し、研究目的に沿うような 14 個の概念を生成した。

②結果図とストーリーラインの作成；概念間の関係を結果図としてまとめ、結果図をもとにカテゴリー化を行った。結果図を文章化したものがストーリーラインであり、以下が要約である。

明確な理由や動機があって特定の心理療法を中心としたのではなく、その中でも特に大学院の指導教員が何の心理療法を専門としているかということが強く影響している。しかし、確固とした中心としての心理療法があるわけではなく、視点として中心の心理療法があるという感じである。故に実際の現場で、中心として用いている心理療法の枠組みから入ることへのためらいがあり、面接開始時点においては心理療法を決定しない。そのため、実際に心理療法を選択する際に、積極的に自分の中心とする心理療法から入るのではなく、折衷的対応を行っていると考えられる。

③理論化；ストーリーラインより、治療現場における心理療法の選択過程に関する特徴像を考察する。自分の中心とする心理療法の決定する過程には、大学院の指導教員の影響が強い場合が多いと言える。また、実際のクライアントに対応する際、そのクライアントに対して心理療法が適用可能かどうかということを意識するが、初めから心理療法の枠組みで面接をすることは少ない。